

---

# 家庭教師ヒットマンリボーンと虹の守護者

チョモ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンリボーンと虹の守護者

### 【Nコード】

N3475Z

### 【作者名】

チヨモ

### 【あらすじ】

主人公・葛原ユウは、数少ない虹の属性を持った、少女だった。リボーンは、ユウの正体にきずいた。ユウは、世界を守る73（トリニッセテ）の守り人だった……。ツナ達と守り人達の物語がここに、始まる。

## 登場人物紹介来る！

主人公

葛原 ユウ（くずはら ゆう）

性別 女

年齢 14歳

性格 少し天然、子供っぽいけど仲間思い

一人称 オレ、私

二人称 名前、苗字

誕生日 7月24日

髪の色 茶色

目の色 アクアブルー

髪型 ポニーテイル

身長 145cm

体重 35kg

家族構成 姉

武器 妖刀天竜 (ようとう てんりゅう)

属性 虹

説明 アルコバレーノの上に、立つもので、ボンゴレ虹の守護者である

あとトゥリニセツテの、人柱の一人である

裏社会では、「天界の使い者」と呼ばれている

武器の能力は、話の中で解ってきます。

人の心が、少し読める&人の気持ちを読める。

大抵自分のことは、「オレ」と言うが時々「私」になる。

しゃべり方が、男の子っぽい時と、子供っぽい時など様々変わる。

両親は、他界しており、家族は姉のみ

主人公の姉

葛原 麗華 (くずはら れいか)

性別 女

年齢 18歳

性格 クールで興味が無いものは眼中にない

一人称 私

二人称 名前、あだ名

誕生日 9月10日

髪の色 青っぽい銀髪

目の色 マリンブルー

髪型 ロングヘア

身長 165cm

体重 40kg

家族構成 妹

武器 拳銃

属性 虹

説明 本当は、自分がアルコバレーノの上に立つものであり

妖刀天竜も自分が、持っているもっただた。

ヴァリアーの、虹の守護者。

裏社会だと、「紅くれないの女王」

結構腹黒くなります。特に、自分の気に入った物に何かされる  
るとなります。

麗華はヴァリアーの虹の守護者です。

武器の説明は話の中で、

妹のユウウらんでいる。

主人公の親友

赤神 リユウ (あかがみ りゆう)

性別 男

性格 獄寺みただけど、お人良し

一人称 俺

二人称 名前、苗字

誕生日 12月12日

髪の色 きれいな銀色

目の色 茜色

髪型 短髪のツンツンヘア

身長 168CM

体重 55Kg

家族構成 両親

武器 大弓

属性 大空

説明 ボンゴレの上に、立つもので、

ユウと同じく、トゥリニセツテの人柱の一人

裏社会では、「白き破壊神」と呼ばれる。

武器のことは、話の中で、

ユウのことを慕っている。

時々ユウのストッパーになるかともある。

門外顧問として動いてる。

バジルと結構仲がいい。





## 登場人物紹介来る！（後書き）

ユウ達の性格が（しゃべり方などがよく）本編で少し違う時もある  
かもしれないですが、  
気にしないでください。

本編では、もっとキャラが出てきます  
その時は、後書きに書いときます。

## プロローグ 虹の少女現る！

「ここが、並盛中か」

オレ、葛原ユウ

一応、女です。

確か、来たらすぐに、職員室に来てって言ってたな。

「あ、ヤベ場所わかんない。」

誰かに聞くか

お、そこに女の子発見！

「あの、すみません。」

「！は、はい！」

え、なんで、顔が赤いの?? (ユウは、天然です

「職員室ってどこですか？」

「えっと・・・」

そのあとに、丁寧に説明してくれた。

「うん、わっかた、ありがとう」

「／／／／お礼を言われることじゃ、ないので・・・失礼します。」

わあ、ダッシュで逃げられた。

まゝいつか職員室の場所もわかったし、いくか。

くツナサイドく

「おはようございます！十代目！」

「おはよ、ツナ」

「おはよう、獄寺君、山本」

「早く席に着け」

「今日は、転校生を紹介するぞ」

どんな子だろ？

「入って来い。」

「はい」

くツナサイド終く

「入って来い」

「はい」

「葛原ユウです、よろしく。」

「席は、沢田の隣だ、沢田手挙げる」

「はい」

ふうん、いいところに座れるじゃん。

「えっとよろしく、沢田」

「よろしく葛原さん」

〜プロローグ終〜

プロローグ 虹の少女現る！（後書き）

あゝユウって、こんなのだっただけ？

「そんなの聞いてわかるか」ですよ、すみません。  
まゝ頑張って書いていきます。

つーかツナサイドやった意味無いな（ガーン）  
やるんじゃないかった。

## 第1話 リポーン来る！

（ホームルーム終）

「ユウちゃんって、何処から来たの？」

「どの辺に住んでるの？」

「えっと」

あゝ、また何で質問攻めにされてんのかなオレ  
何でこんなにも、女の子ってこんな事聞くんだよ。  
オレは、何かしたのかよ。

オレは、そんな事を考えていたら、救世主（？）が現れた。

「まあまあ、そこまでにしてやんなよ。」

「山本君が、言うなら。」

こいつじゃいけないんだ

「ありがとう」

「どづいたしまして」

「名前は、君の名前は、ナニ？」

「オレの名前は、山本武だよろしくな」

「よろしく山本」

「こちらこそ」

山本という奴に興味がわいた。  
隣の席の沢田にも興味がある。

---

あ、次の授業って何だろ

丁度、沢田が来たので聞いてみるか

「沢田、次の授業って何かしてるか？」

「う、うん数学だよ」

「サンキュー」

「何、十代目に聞いてんだよ！」

「は？」

「ご、獄寺君！」

なにコイツ

オレの仲間に似てやがる

マジで似てる

姿とかじゃなくて、  
感じがめっちゃ似てる。

「黙っていてください、このアマ、絶対にしめます。」

「な！」

「（獄寺君なに言ってるの、葛原さん次の授業を、聞いただけなのに）」

「……やる前に名前、名前を教えて。」

オレを倒すとか馬鹿だ

「ち、獄寺隼人だ」

「じゃ、戦うなら、放課後ね。」

「（コイツやっぱり、天界の使い者だ）」

わくばれてる、やばくない

なんで、人の心が読めるっかて

まゝいつか教えます。

「な！葛原さん戦えるの！」

「一様」

この気配は、リボーンか



「チャオツス！」

「……。」

「リ、リポーン！」

「そんな事より、なぜこんなお前がいる」

「……。君は、私の正体に気づいて聞いているのかい。」

沢田たちは、言っている意味が分かってない  
リポーンの奴教えてないな  
教えてるわけ無いよな

「沢田その赤ちゃん何処から来たの  
もうすぐ授業始まるから、どうするの」

「話を逸らすんじゃない」

「リ、リポーンダメだよ」

「みんな席につけ」

よっしゃ！先生良いタイミングできた！  
リポーンから逃げれる！

「しょうがね、また来るぞ」

「（（もう来るな））」「ツナ&ユウ」

沢田大丈夫か、方程式は出来るようにしようよ。  
(数学の授業のとき、ユウはひそかに思った。)

↓放課後↓

「で、どうつやて戦うの?」

あゝやる気無いな

でもなゝやるっていちゃったもんな

「……真剣勝負に決まってるんだよ!」

「あつそ、じゃあ始めよ。」

しょうがない、さっさと終わらせよう  
殺さない程度にやればOKだよな

「ちょ、ちよつと待って二人共!」

「どうした沢田」「どうしました十代目」

「え、二人共こんな場所で戦ったもいいのか？」

「知らない」「知りません」

だってオレ、売られたケンカは買う主義だからどこでも良いし

「まあまあ、やめるよ二人共。」

「は、やめた。」

やる気が無くなった。

「チ、しょうがね十代目が言われただからだ」

「ツナすげなー。」

沢田サンキュー助かった

無駄な戦いはしたくなっかたからな

「チャオツス」

げ、また来た

「リポーン」「小僧」「リポーンさん」「・・・」

「お前、さっきの質問の答えがまだだぞ」

「・・・じゃあ君は、私の正体に気づいて聞いているの」

気づいてるよなアルコバレーノのリポーン

私は君の上に立つ存在だよ

「ああ、気づいているだからこそ聞いている」

へ〜気づいていたんだ以外

「それは、言えないすまないなアルコバレーノ」

「……。その言い方、お前の母さんは嫌いじゃなつかたか」

コイツ、母さんの事ワザと言ってるだろ

ムカつくな

「ちょっと待て、リポーンと葛原さんって知り合いなの!」

「私の場合腐れ縁」 「知り合いだぞ」

「リポーンさんコイツは、天界の使い者ですよね!」

「そうだぞ」

いやな予感がする

「葛原、お前なぜ隠していた」

「いや〜面倒なこと言ってもしょうがないし(焦り)」

「やっぱり勝負しろ〜!」

「いやだ〜!!!」

やっぱこうなるんだな（涙）  
何で、オレの通り名聞いてこうなる。  
ムカつくなーこゆうタイプ

「天下の天界の使い者もだめだな」

「何だとりボーンそれは、聞き捨てならんぞ」

「やってやるうじやないの」

それから戦って

勝ったのはやっぱりオレ

でも獄寺も、もつと修行したら強くなりそう

ま、でもオレよりは無理だけどな

どーやって倒したっかて

『殴った』それだけです。

簡単でしたよ。

走って殴ったら反応出来ずに倒れてくれました。

## 第1話 リボーン来る！（後書き）

は〜やっと終わった

つうかりボーン出てきても役目無しかよ

ユウが、大変そうだな

ユウ「なら、もう少し助けるよ」

作者「無理ですね。そして私の心を読むな！」

ユウ「ひどくね、そにしても自分のオリキャラに対しての扱い。」

作者「ユウって格闘技出来たっけ？」

ユウ「スルーすんな！」

作者「答えるや。」

ユウ「サーセン、一様できる・・・ってか作者してるだろ

自分で書いてるんだから。」

作者「読者の皆さんのためだよ（笑顔）」

ユウ「ふ〜ん、じゃあそろそろ」

作者&ユウ「これにて、第一話、おわりです。」

## 第2話 風紀委員長来る！

「ただいま」

て、言っても誰もいないけどな  
両親二人共早く他界したからな  
ま、全然寂しくないんだけどね。

「オイ、さつさとメシ食べねーのか」

「わかったよ天竜」

あ、天竜は人じゃないから、妖刀だからね、  
学校に連れていたし、お帰りとは言えないじゃん。（でも、しゃ  
べるけどね）

何で、学校に連れて行ったかて、何があるかわからないから持って  
行ったんだよ。

どうやって持って行ったのかって、コイツ、ネックレスになるん  
だ不思議だよ。

コイツの能力で、人の心が読めたりなど出来るし、オレの心の中  
で話してくれるから結構便利だ。

でも、コイツを扱える奴は、天竜が決めるし、  
無理して使うと、重いし、鞘から抜けないから、扱える奴も少な  
い。

ま、コイツの説明はここまで、

さつさと宿題終わらせるぞ！「ご飯食べながら説明してた。

「次の日」

「いつてきまーす。」

は〜、絶対何か起こるぞ、

だって、起きた時から嫌な感じがするからな。

獄寺に変な事を聞かれるのか、

リボーンに質問攻めにされるのか。

こんなもんで、終わって欲しい。

「はあ〜」

「お前、さっきからそればかりだな」

「（解っているだろ）」

「ああそうだが」

う〜、コイツ嫌だ（涙

オレのいじって楽しいか

やっぱり、コイツSだ、DSだ！

ひどい、ひどすぎる。

「お前が、子供っぽいからだ」

「（何を言う！オレは子供っぽくない！）」

「ほら、そんなんで怒るのも子供だからだ」

「（うるさい！絶対に授業のときに話しかけんなよ）」



「はいはい」

「クラスの中心」

「はあ」

「おはよう葛原さん」

「はよ、葛原」

「……。」怒

獄寺の奴、昨日の事まだ根に持っているのか。

「おはよう、沢田、山本、獄寺」

「どうしたの、葛原さん、ため息ばかりかして」

「ん、気にしないでくれ」

「（え、まさか、昨日のリボンの質問が悪かったのかな）」

沢田が心配する目で見えてきた

え、オレ何かやったけ

う、ん悩んでも出てこない。

人の心を読むの嫌いだけど、やってみるか。

「沢田、お前は悪くないぞ、悪いのはリボンだからな」

「え！何で聞きたいことがわっかつたの！？」

「え、何て言うか勘、そう勘」

えっと、これは言えないんだよ

そんな事言っただけ信じてもらったこと無いし。

「へへそうなんだ」

「ホームルーム始めるぞ」

嫌だな〜先生の話って長いしつまらないし退屈だ〜

「ホームルーム終わるぞ」

やっと終わった

ん？あそこに居るは、学ランを着た男の子

……。この男の子の制服、学ランじゃないよね  
誰だろう？

「ねえ、沢田あの学ラン君誰」

「あれは、ヒバリさんだよ」

「ヒバリ、鳥の名前の？」

「う、うん、並中の風紀を守ってるんだ」

「そうなんだ、あともう一つ」

「何？」

「沢田の事、『ツナ』と呼んでもいいか」

「え、いいよ。じゃあオレも葛原さんのこと『ユウ』って呼ぶね」

「わかった」

何でだ、オレが笑ったらみんなオレを見た  
え、オレそんなに笑ってなっかたのかな（焦り

）放課後

良かったまだ、何も起きていないって事は  
今日の嫌な感じは、勘違いだよな

「ねえ、君」

スルーたぶんオレに話しかけているんだよな。  
ヒバリとかいう奴

「ねえ、君無視しないでくれる。」

「……はいなんでしようか」

「君、何でネックレスなんか持ってきてるの」

「母の形見だから」

嘘はついてないよ

コイツは元は母さんのものだからね

「ふん、でも風紀を乱したから君を咬み殺す」

「へえ、やってみなよ」

「（僕が咬み殺すといっておびえない、面白い）」

トンファーを、何度も振り回すけど

全然当たらないよ。

まだまだだよ、もう少し腕を上げたら

天竜使ってもいいかも。

「君、名前は」

「……。葛原ユウ、お前は」

お、咬み殺せないとわっかたな

「雲雀恭弥」

「また、会いましょうヒバリさん」

「……。僕を怖がらない人が居たなんてな」

オレは何て事を言ってしまった

何が『また会いましょうヒバリさん』っだ

もう、会いたくない

会ったびに、攻撃くつらたら

オレ、死ぬかも……。

「死ねば良いんじゃないか」

「（酷くないか、天竜。でも、まだ嫌な感じが無くならない）」

「確かに、もうすぐ沢田達に何か起きるのではないのか」

「（それは、嫌だなツナ達は、久し振りに興味を持ったからな）」

オレは知らなかったもつすぐ、ツナ達の運命を変える物がやってくるとは……。



## 第2話 風紀委員長来る！（後書き）

はあ〜書き終わったぜ！

今回は天竜&ヒバリさんが初登場！

と言う事なので、私のリア友の事を話します。

ユウ「どう言う事だよ（怒）」

作者「だって、私の友達ヒバリさんにとても

似てるからその事だけでもと思って」

天竜「その友達とやりに話して良いと

許可をもらったのか？」

作者「いいえ、私の友達（一部を除いて）小説書いていること知らないもん」

ユウ「オ、オイ良いのかよ、言っつて」

作者「多分、ばれたら、咬み殺されますね」

ユウ&天竜「なら、しゃべんなよ」

作者「サーセン」

これで、第2話終わります  
それでは〜またの機会に





### 第3話 嫌な感じの正体来る！（前書き）

第2話で最後にユウが、感じた嫌な感じの正体にせまります。  
まあわかる人には、わかります。

### 第3話 嫌な感じの正体来る！

「。。。。。」

昨日の嫌な感じが、もっと暗くて重い感じになった  
なんか、気持ち悪い

「何も起こらないでくれよ。。。。。」

「ユウ、気をつけるよお前の勘は特に当たるのだからな」

「（分かっているよ、でもツナ達に何か起こらなければ良いんだが）」

で、なぜオレは今病院にいる。

（登校中のこと）

今日は静かだな。。。。。  
何かあったのか

「あ、葛原さん」

「ん？あ、笹川どうした、何かあったのか？」

「え、知らないの並中生が襲われてる事」

「知らなかった」

笹川なんか暗い顔してるな

「どうした、何かあったのか」

「そのお兄ちゃんが、銭湯の煙突に登って怪我したみたいで」

「そうか……。オレも行くか」

「え！？何で」

「笹川の兄さんが怪我したんだから行って見るか」

「葛原さんありがとう」

「気軽にユウで良いよ、笹川さんのこと京子と呼んで良いかな？」

「いいよユウ／＼」

（病院の中）

「お兄ちゃん!!」

「え……。？」

「どうして銭湯の煙突になんて登ったの!!!!」

「（どんな作り話したの—————!?!）」

「やっぱり、何かありそうだな。」

「オイ、ツナ」

「ん？」

「ちょっと来い」

「う、うん」

「病院に並中生ばっかり〜!!」

「そんなのどうでも良いけどさ、聞いたか、ヒバリが敵を倒しに言った事」

「ホント！ならヒバリさんが敵を咬み殺しにいったんだ!!!!」

「……。」

「ゆ、ユウ？（何で悲しい顔するんだろ？）」

〜ヒバリサイド〜

人が倒れる音

人の体の悲鳴の音しか聞こえない中  
急に音が止む

「やあ」

「よく来ましたね」

「ずいぶん探したよ  
君がイタズラの首謀者？」

「クフフそんな所ですかね  
そして君の街の新しい秩序」

なんか、笑い方がおかし

「寝ぼけているの？  
並森に二つの秩序はいらない」

「全く同感です  
僕がなるから君はいらない」

ムカつく

「それは、かなわないよ  
君はここで咬み殺す」

くヒバリサイド終

ヒバリが危ない……。  
でも、そんなの勘なのに怖い  
どんだんせまって来てる

「ゆ、ユウー！」

「！あ、ゴメン」

「どうした？」

「嫌な感じがしたただけだリボーン」

ブチッ

「ひっ」

「何だこりゃ」

「レオンの尻尾が切れたな」

「っーかカメレオンって尻尾切れるっけ」

「これが起こるってことは不吉だからな。

ユウお前の勘があっているかもしれないぞ」

第3話 嫌な感じの正体来る！（後書き）

ヒバリさんやばい奴を咬み殺せるか

（原作と同じなので・・・。）

ユウの嫌な感じは当たるかもしれない

それでは第4話でまた会いましょう

#### 第4話 雲雀に危険来る！

「リポーンそんな事無い  
絶対に無い」

そんな事あつてたまるか  
人が傷つくところは、もう見たくない

「お前達、葛原家はそう言う力を持っているだろ」

「……。リポーン、私は欲しくて持っているわけではない」  
こんな、力……。

「ユウ、お前何言っている」

「！天竜……。」

「てんりゅう？」

「！、すまない気にしないでくれ」

「ユウお前、天竜を実体化させねーのか」

「リポーン、そんな事したらみんなビククリしてしまう」

それで、何度いやな目にあつたことが

「ユウ、てんりゅうって何？」



「ツナ、時が来たら教える」

少しでも長く、友達でいたいから

「（ユウやっぱり、気にしているのか）」

くヒバリサイドく

「座ったまま死にたいの？」

「クフフフ面白い事を

言いますね

立つ必要が無いから座っているんですよ」

ムカつく、笑い方も言っている事もムカつく

「……。君とはもう口を聞かない」

「どーぞ好きなように

ただ今喋つとかないと二度と口が聞けなくなりますよ」

「!?!」

なんだこの殺気は

「ん？」

汗が吹き出していますが  
どうかなさいましたか？」

「黙れ」

「せつかく心配してあげたのに  
ほらしっかりしてくださいよ」

「僕はこっちですよ」

「!!!」

体が動かない・・・!

「海外から取り寄せたて見たんです  
クフフフ本当に苦手なんですね  
・・・桜」

〜ヒバリサイド終〜

「って、大丈夫なのかよレオン」

「尻尾が切れて形状記憶の制御が  
できなくなってるんだ」

レオンすごくいろんな物に変わるな・・・。

「また並中生がやられた!!」

「え!?!」

周りが騒がしい・・・。

「色々あるんだよユウ・・・。」

でも騒がしい

なんかツナほっとしてる顔しているな

てゆーかりポーン何してんだー！

「4本か」

風紀委員の口の中見て言ったなるほど歯ね

「おい、何してるんだよ!!」

「他に考えにくいな」

「「!」?」

「ケンカ売られてんのは

ツナお前だぞ」

「へ!」?

「そうきたか」

くヒバリサイドく

ガッ

嫌な音が響く

「おっと」

「なぜ

桜に弱い事を知っているのか？って顔ですね」

「さてなぜでしょう」

「……。」

「おや？

もしかして桜さえなければと思ってますか？」

「それは勘違いですよ

君レベルの男は何人も見てきたし  
幾度も葬ってきた」

「地獄のような場所だね

さぁ続けましょう」

（ヒバリサイド終）

#### 第4話 雲雀に危険来る！（後書き）

……。最近思った、何でこんな駄目文を書いているんだ（涙  
私のリア友（一部を除いての人）に知られたら（号泣

ユウ「良いんじゃない、知られたら知られたで」

作者「確かに、知られたで良いんだけど……。」

ユウ「良いんだけど？」

作者「……。リア友が、仲間の前で言いやがった

それも、前言った、ヒバリさん似の人の前で」（涙

ユウ「？ヒバリさん似の人の前はいけないんだ？」

作者「ヒバリさん似の人はPCの小説が嫌いなんだ

なのに言ったんだよ酷くない」

ユウ「（一様同情しとこう）ドンマイ」

作者「一様って酷くない！」

ユウ「！なぜ心が読めた！」

作者「お前の顔見れば分かるわ！

もう、知らない（もうダツシュ」

ユウ「ヤベ、作者がすねちゃった

まあ、次回もよろしく  
まで作者ー！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3475z/>

---

家庭教師ヒットマンリポーンと虹の守護者

2012年1月9日23時53分発行